

平成三十年（二〇一八）三月二十六日発行
『大倉山論集』第六十四輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

幕末・明治における新井白石著作の蒐集

— 埼玉の「好古家」小室元長と白石社 —

古畑侑亮

幕末・明治における新井白石著作の蒐集

―埼玉の「好古家」小室元長と白石社―

古畑 侑亮

目次

はじめに

一 「好古家」による白石著作の蒐集

(一) 蒐集された白石著作

(二) 編集される白石著作

(三) 抄出される白石情報

二 「白石社雑記」の分析

(一) 白石社の新聞記事

(二) 白石社への手紙

(三) 白石著作の献本と貸借

三 白石社設立までとその後

(一) 墓の探索から白石社まで

(二) 白石社のその後

おわりに

キーワード

編纂物 結社 活字出版 「古史通或問」

はじめに

故有て十七歳ノ昔より六十（文政壬午生）ノ今日ニ至り先生を欽慕すること一日ノ如く、其遺著搜索ニ心を尽候得共、何分僻陬独力ノ致す所僅ニ数種ニ過ぎず¹

これは、「武蔵国比企郡番匠村廿八番地 平民元貞父 小室元長」が、「鈴木少教正閣下」なる人物へ宛てた書簡の一節である。「文政壬午」つまり文政五年（一八二二）生まれと書かれていることから、「十七歳ノ昔」は天保九年（一八三八）、「六十ノ今日」とは、明治十四年（一八八一）である。

書簡の中には、「白石」の語が見えることから、元長が「欽慕」する「先生」とは、江戸中期の儒学者・新井白石（一六五七—一七二五）を指しているとわかる。「故有て」幕末から明治の世まで白石を慕い、その著作を熱心に「搜索」し続けていた人物がいたのである。彼は、白石の著作をどのように蒐集していたのだろうか。本稿は、元長を中心に幕末・明治における白石著作蒐集の側面を明らかにするものである。

小室家は、埼玉県比企郡ときがわ町番匠に今も続く家である。近世において当該地は、番匠村と呼ばれ、比企郡西部の都幾川によってできた谷の末端に位置する、秩父山地外縁部の低い山間の村々のひとつであった。元禄十一年（一六九八）以降、旗本佐久間氏の知行地となった。維新後は、武蔵知県事支配から、品川県、蕨山県、入間県、熊谷県を経て、明治九年（一八七六）に埼玉県となり、現在に至っている。

書簡を書いたのは、小室家五代目の元長である。代々医者を営む家に生まれた元長は、祖父や父が経営していた医学塾・如達堂に学ぶとともに、忍藩儒・芳川波山²（一七九四—一八四六）に漢学・漢詩文を学んでいる。安政五年

(一八五八)、父元貞の死去に伴い、家督を継いだ元長は、文久元年(一八六一)まで番匠村の名主後見役を務める。

維新後の明治五年(一八七二)には、入間県から医学所出仕に任命され、地域の医療行政に関わった。明治十年代には、医業を廃して隠居し、古物や古文書の蒐集に励んでいた。加えて、軍書や地誌の筆写・校正を熱心に行い、なかでも小田原北条氏の所領役帳の校正を後半生のライフワークとし、『校正小田原北条家分限帳』(小室593)を遺している。その後も、さらなる分限帳の校正に心を寄せながら、明治十八年(一八八五)に六十四歳で亡くなっている。

元長は、明治十三年(一八八〇)十月二十九日の『朝野新聞』に「比企郡番匠村の好古家小室元長氏」として紹介されている。明治十年代から二十年代の新聞・雑誌には、元長に限らず「好古家」と呼ばれる人々がしばしば現れる。彼らの多くは、村・町役人あるいは医者や教員を務めていた人々であり、名望家として成長していく人物もいた。

「好古家」の活動は従来、考古学や人類学、あるいは民俗学の前史として取り上げられてきた。さらに二〇〇〇年代以降、美術史の分野においても芸術やアカデミズム成立以前の「古い物の世界」という問題関心から当時の文化(財)行政と「好古家」たちの活動の関わりについて説明が進められている。歴史学研究においても研究の対象となり、久留島浩氏は、研究動向の整理を行った上で、海外に渡ったコレクションとそのコレクターの視点を加えている。さらに、地域博覧会を事例として、江戸(東京)・京都という「中央」から奈良や笠間といった「周縁」へと対象地域を広げている点も重要である。「好古家」たちは、明治三十年代には活動の場を失っていくとされるが、近年は「古器物」が多いとされた奈良を中心に、二十世紀の郷土史へ継承されていく「好古家」的な営みの健在ぶりについても研究が進められてきている。

このような研究動向を背景に、江戸・東京周辺地域に位置する小室家も、その豊富な蔵書・書簡史料から「好古家のアーカイブズ」として注目され、五代元長周辺の「好古家」たちのネットワークが分析され始めている。

重田正夫氏は、元長らによる『新編武蔵風土記稿』¹²の写本作成事業と、根岸武香（一八三九—一九〇二）・近藤瓶城（一八三二—一九〇一）による活字出版事業について明らかにし、活字出版の背景には、『風土記稿』があれば、「長ク旧名ヲモ伝フヘク、町村毎ニ其成立ノ故事ヲモ伝フヘク、社寺以下名物等ノ存廢ヲモ伝フ」ることができる¹³との武香の意識があつたと指摘している。

藤田大誠氏は、近代国学と郷土史との関わり的一端として、「好古」的学問結社である好古社を接点とした皇典講究所系の国学者と近藤瓶城との交流を分析している。そして、近藤活版所による『新編武蔵風土記稿』『史料通信叢誌』の出版を取り上げ、活字史料を掲載した書籍群を編纂・刊行する仕事こそ近代国学を担った明治期の国学者の真骨頂であつたと位置づけている¹⁷。同じく近藤活版所が刊行した『史籍集覧』シリーズについては大久保久雄氏による研究があり、『史籍集覧』に元長が筆写・校正した「鎌倉大草紙」¹⁹が収録された経緯については、田口寛氏が解説している。これらの研究から元長ら「好古家」にとつて出版活動との関わりが重要な要素であつたことがわかる。

「好古家」たちは、体系的な著作を遺すことは少ないものの、蔵書をはじめとした豊富なコレクションを形成している。なかでも、様々なモノ・コトの蒐集・調査の成果を集積した編纂物は、彼らの意識・関心を反映したものと見て重要である。

元長も多くの編纂物を遺しているが、それらのうち『工村々舎叢書』九冊（小室2983～2991）については、新井浩文氏が同叢書に収録された中世史料の紹介と比較を行っている²²。また、芳賀明子氏によって、元長が好古仲間ととりかわした書簡中に見られる資料名と同叢書中の資料との対応関係が明らかにされた²³。

このように元長の編纂物の中では、とくに中世文書について『工村々舎叢書』の分析は行われている。しかし同叢書には、実に様々な資料が収録されており、価値があるのは必ずしも古い文書に限らないだろう。また編纂物は、個

人の蒐集物としてそれぞれ有機的な関係を持っているはずであり、他の編纂物も含めた全体像を明らかにした上で、並行して使用していくべきであると考ええる。

そのような問題意識から筆者は、元長の編纂物のうち分析の対象とされることがほとんどなかった『不如学齋叢書』、『叢書』、『南木廼家随筆』の内容分析を行ってきた。その結果、『不如学齋叢書』全三冊（小室2974～2976）と『叢書』一冊（小室2982）が、天保から明治ゼロ年代半ばにかけて作成された複数の抄録集を再編集することで作られたものであること、残り二冊の『叢書』（小室2980・2981）が写本を合冊した編纂物であることが明らかになった²⁴。また、明治ゼロ年代後半から十八年にかけて著述されたと推察される『南木廼家随筆』全一編（小室2963～2973）にも書物からの抜書が見られるが、その内容の半分以上は新聞記事の抜書であった。しかし、それら筆写された新聞記事から明らかになったことも多く、新聞からの抜書を分析することの有効性を知るに至った²⁵。これら編纂物の中には、白石の著作や白石に関する記事を筆写したものが含まれており、元長による白石受容解明の手がかりとなると考えられる。

以上を踏まえて本稿では、小室家文書中の編纂物を中心に分析することで、幕末・明治を生きた元長による白石著作の蒐集の実相を明らかにする。

本文中では、図表名を【】で括った。小室家文書中の文書番号は、例えば（小室123）のように示すこととする。引用史料において、「」内は割注、〈〉内は後筆、「」内は筆者による補足である。■は未判読文字、傍線・波線は筆者による強調を示す。旧字体は新字体に改め、書物名については、便宜上太字のゴシック体で示した。史料名の丸番号も筆者が便宜上付したものである。

なお、本稿の末尾に【白石関係著作出版略年表】を付した。適宜参照願いたい。

一 「好古家」による白石著作の蒐集

(一) 蒐集された白石著作

元長は、白石の著作をどのように蒐集していたのだろうか。小室家文書中の蔵書を探ってみた結果が【表1 小室家文書中白石著作一覽】である。

蔵書印に注目すると、ほとんどの書に「小室元長蔵書」の印が捺されているが、何点か他の人物の蔵書印も確認できる。

『藩翰譜』（小室2571～2581頁）巻一～一三には、元長の印と共に「如達草堂」の蔵書印が捺されている。「如達（草）堂」は、元長の父・元貞（一七八九―一八五八）の雅号であり、同書は父親の代から所蔵されていたことがわかる。他に「如達草堂」印のある白石著作は見当たらず、元長が早い段階で目にした著作のひとつであると推察される。

『白石逸書』（小室2570）には、「山名氏蔵書」の印が確認でき、同書が村岡藩山名家の旧蔵書であったことがわかる。さらに、「愛岳麓蔵書」印の捺された『退私録稿』（小室3012）は、幕臣・大久保忠寄（西山・？―一八〇一）の旧蔵書である。小室家と両家との直接の交流は確認できない。入手経緯については今後の課題としたいが、元長は、維新时期に流出したと思われる幕臣・大名家の旧蔵書も蒐集し、保存していたと考えられるのである。

『白石桃溪尺牘』（小室2586）乾巻の末尾には、小瀬復庵（桃溪・一六六九―一七一八）の「擬源白石詠烟草十六韵」が付されている。「明治十二年三月卅日 工村記」との記述から、元長が明治十二年（一八七九）の三月に加筆したことがわかる。

表1 小室家文書中白石著作一覧

| 文書番号 | 書名 | 巻 | 刊/写 | 表紙色 | 蔵書印 | 刊行年 | 校正 | 書込 | 奥書 |
|-------------|-------------------------------|----------|-----|-------|-------------------------|---------|----|----|----|
| 2571~2581-1 | 『藩翰譜』 | 序・巻1~13 | 写 | 濃茶 | [小室元長蔵書] / 1~13巻 [如達草堂] | | ○ | × | × |
| 2736・2737 | 『東雅』 | 巻1~20 | 写 | 濃茶 | × | | ○ | × | × |
| 2978 | 『新安手簡』 | | 写 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 2547~2550 | 『正徳朝鮮聘事雜録』 | 上・中・下・録余 | 写 | 黒 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 2614 | 『白石先生贈土肥父子国字簡』 | | 写 | 薄茶 | [小室元長蔵書] | | × | × | × |
| 2532~2538 | 『訂正増訳采覧異言』 | | 写 | 縹 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 2565 | 『白石手簡』 | | 写 | 縹 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 2588・2589 | 『折焚柴之記』 | 上・下 | 写 | 縹 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | ○ |
| 2564 | 『白石欄』 | | 写 | 縹 | [小室元長蔵書] / [安藤文庫] | | ○ | × | ○ |
| 2982 | 『叢書』③※註5を参照 | | 写 | 縹 | × | | ○ | × | × |
| 2551~2563 | 『白石欄』 | 巻1~13 | 写 | 薄茶布目 | [小室元長蔵書] | | × | × | ○ |
| 2602 | 『古史通或問』 | | 写 | 山吹 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 2735-1~4 | 『東音譜』『文朝令』『黄白答問』『白石先生著述書目并附録』 | | 写 | 山吹 | [小室元長蔵書] | | × | × | × |
| 2241 | 『楠家三代私評弁』 | | 写 | 薄茶刷毛目 | 「天保三年辰年卯月七十三翁 大久保英尚 写之」 | | ○ | × | × |
| 2570 | 『白石逸書』 | | 写 | 薄茶刷毛目 | [山名氏蔵書] | | ○ | × | × |
| 2615 | 『白石先生隨筆』（紺珠） | | 写 | 赤茶刷毛目 | [梅澤清] | | ○ | × | × |
| 2586・2587 | 『白石桃溪尺牘』 | 乾坤 | 写 | 赤茶 | [屈棟之印] / (■) / [小室元長蔵書] | | × | ○ | × |
| 3012 | 『退私録稿』 | 四之中 | 写 | 焦茶 | (小室) / [愛岳麓蔵書] | | ○ | × | × |
| 2599 | 『鬼神論』 | 巻1~4合綴 | 写 | - | - | - | - | - | - |
| 2600 | 『古史通』 | 巻1~4合綴 | 写 | - | 「勝輝崇写」 | - | - | - | - |
| 3024・3025 | 『白石余筆』 | 1・2 | 写 | 赤茶 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 3105・3106 | 『白石先生遺文』（廿） | 上下 | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | ○ | × | × |
| 3107・3608 | 『白石遺文拾遺』（廿） | 上・下 | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | 弘化2年10月 | × | × | ○ |
| 3123 | 『奥羽海運記』『畿内治河記』（廿） | | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | × | × | × |
| 3129 | 『奥州五十四郡考』（廿） | | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | × | ○ | × |
| 3130 | 『南島志』（廿） | | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | × | × | × |
| 3138~3140 | 『木門十四家詩集』（廿） | 上・中・下 | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | 安政3年6月 | × | × | ○ |
| 3146 | 『人名考』『准后准三后考』（廿） | | 刊 | 濃茶 | [小室元長蔵書] | | × | × | × |
| 2210~2213 | 『古史通』（一貫堂） | 巻1~4 | 刊 | 縹 | [小室元長蔵書] | 明治4年秋 | ○ | × | × |
| 2313 | 『白石先生年譜』（白石社） | | 刊 | 薄黄土 | [小室元長蔵書] | 明治14年 | ○ | ○ | × |
| 2287 | 『西洋紀聞』（白石社） | | 刊 | 薄黄土 | [小室元長蔵書] | 明治15年5月 | × | × | × |
| 2314・2315-1 | 『五事略』（白石社） | 上・下 | 刊 | 薄黄土 | × | 明治16年5月 | × | × | × |

註1 埼玉県立文書館所蔵小室家文書中の白石著作、および「小室家文書目録」（埼玉県立文書館、1997）より筆者作成。

註2 「鬼神論」（小室2599）・「古史通」（小室2600）については、原本未確認のため、で示した。

註3 蔵書印欄の [] は、方形印、() は円印を示す。

註4 (廿) は、「廿兩亭叢書」を指す。

註5 「叢書」の収録書目のうち、「奉命教諭朝鮮使客觀樂筆談」「聖像考」「決獄考」「楽考」「木瓜考」「国郡名字考」「河川通用考」「新室手簡」「与内匠頭書」「説楽氏略系」（「白石神書」からの抄録）が白石著作。

また、『折焚柴之記』（小室2588・2589）の巻末には、擱筆日についての考証とともに、「明治十四年七月廿八九日扶病与白石社刊行活字本匆々一校了 笠山小室誠」と朱書され、元長が病をおして架蔵本の『折たく柴の記』を新しく入手した白石社刊行の活字本と校合していたことがわかる。

『折焚柴之記』の他にも小室家文書中の白石著作には、細かな校正が施されている。元長は、単に白石の著作を集めるだけでなく、より正確なテキストを希求していたのである。

(二) 編集される白石著作

「白石爛」（小室2564）には、「安藤文庫」の蔵書印があり、鳥羽藩医・安藤文沢（一八〇七—一八七二）の旧蔵書であると考えられる。元長は、文沢のもとに住み込みで医学修行を行っており、その後も親しく交流を続けている。

「白石爛」の目次には、一六の書名が挙げられている。

品革威考 鎧直垂考 將軍宣下三十一度儀不同次第 進呈案 楽封 俳優考 外国通信事略 殊号事略 朝鮮聘使後議附 本朝宝貨事略 高野山事略 琉球事略 以酌庵奏議 退私録 江関筆談 那須国造碑積文

このうち、実際に綴じられているのは、傍線を引いた七点のみであり、残りの九点については、別の叢書へと収録し直されたのではないかと考えられる。同叢書の巻末には、「右江関筆談并那須国造碑積文二篇明治十一年十二月三日於南木廻家書、時腕骨少快気色興然」と墨書され、最後の二点は明治十年代に入ってから入手したものであり、元長がそれを嬉々として筆写していたことがわかる。

小室家文書には、もう一つの「白石爛」（小室2551〔2553〕）が存在する。その巻末には、「父尚中遺品白石爛為記念（ママ）金呈仕候、永御秘蔵間敷候也」と書かれている。同叢書は、明治十五年（一八八二）九月に、佐藤尚中（一八二七—

一八八二)の遺品として、息子の進³⁰⁾(一八四五―一九二二)から贈られたものである。佐藤家とは父親の元貞の代から交流があった。さらに元長は、明治九年(一八七六)に順天堂医院に入院している。

『叢書』③(小室2982)には、次の一四点の著作が収録されている。

大猷院様御書 花月草紙 奉命教諭朝鮮使客觀樂筆談 聖像考 決獄考 樂考 木瓜考 国郡名字考

河川通用考 新室手簡 与内匠頭書 安政五年黄金写真 設樂氏略系 除邑録 武家執政略

松平定信の「花月草紙」、林鳳岡の「武家除邑録」、林鶯峰の「武家執政略」が綴じられているが、それ以外の傍線を引いた書は、すべて白石の著作である(「設樂氏略系」も末尾に「右白石繕書中に抄録す」とあり、「白石紳書」から書き抜いた系図であることがわかる)。他にも『東音譜』『文廟令』『黄白答問』『白石先生著述書目并附録』(小室27351~4)が合冊されているなど、元長オリジナルの白石著作集が見られる。このように元長は、著作の校正に加え、叢書の編集も行っているのである。

(三) 抄出される白石情報

天保八年(一八三九)に十六歳で芳川波山の四教塾へ入門した元長は、翌年から漢詩手稿帖『鶏肋草』(小室3389)をつけ始める。元長が白石を「欽慕」するようになった時期は、漢学・漢詩文を本格的に学び始めた時期と重なっているのである。『不如学齋叢書』②(小室2975)からは、この頃の元長が書物からの抜書を熱心に行っていた痕跡がうかがえる。同叢書の【35】「半天連」の末尾には、「右三条白石爛外国通信事略附録中ニ在リ」と朱書されている。また、【36】「亀卜」には、「右三条白石紳書ニ就て抄録す」とあり、【43】「奇異物語抄」には、「以上亦就紳書抄出す」と朱書されている。これらの記述から、【34】【35】が『白石爛』二巻(小室2952)収録の「外国通信事略附

録」からの抜書、【34】から【43】までが『白石紳書』からの抄録であることがわかる。

抜書された項目は、「薩摩夜久嶋異人の事」「半天連」「亀卜」「檀紙」「野火留村引水説」「大谷氏奴辞世歌」「大判・大御判」「金座金名」「長沢城攻」「奇異物語抄」である。このように元長は、幕末期から白石の著作を読み、異国人に関する情報や、歴史に関する情報を抄録していたのである。

嘉永五年（一八五二）の正月五日、元長は、隣村の知人等とともに伊勢参りへ出かけ、その紀行文を「遊勢紀勝」（小室2633）として遺している。同書の二月十九日条では、名古屋の熱田神宮を訪れ、「諸大名奉納の灯籠あり、中にも佐久間氏献備を第一とす」として、佐々成政の養子・佐久間勝之（一五六八—一六三四）が献納した「佐久間灯籠」の碑銘を筆写している。さらに、「此勝之の事蹟世にしる人少なり、藩翰譜曰」として、『藩翰譜』の「佐久間」の条を引用している。第二節において小室家文書中の『藩翰譜』が父親の代から所蔵されていた書であることを確かめたが、元長は同書を嘉永五年の時点ですでに読んでおり、それを紀行文の記述に利用していたのである。

明治十年代に編まれた『工村々舎叢書』にも白石の著作を参照した痕がみられる。

様々な人物の花押を筆写した『工村々舎叢書』②（小室2684）【7】「源義貞 源義家 源義仲 新田義宗 新田寛義 源頼朝 源義経 源実朝 北条長氏 北条氏綱 北条氏康 北条氏政 北条氏直 佐久間信就 平信長 平信忠 上杉輝席 花押」のうち、「新田覚義」の丁には、「白石紳書」二云、義貞の為にハ大叔父と申者にて新田藏人太郎義房か弟に荒井禅師覚義と申す人の候ひしが「中略」以上、文殊院問答の条」と朱書され、『白石紳書』が参照されていたことがわかる。

さらに、『工村々舎叢書』⑧（小室2990）には、次のような文章が収録されている。

【史料1】『工村々舎叢書』⑧【3】「白石先生祭典ノ記」

白石社ノ設立有リシヤ朝野ノ諸賢陸続同盟ニ加ハリ忽チ数百名ニ及ベリ、而シテ鈴木慧淳・竹中邦香・大槻文彦三君非常ノ尽力有リシ也、カネテハ五月十九日白石先生ノ祭典ヲ執行ス可シト決議セシカトモ諸事未タ整理セザリシ故之ヲ本月十九日ニ延バシヌ、又此日梅雨恰モ晴レ風塵起ラス稀ナル美日ナリシカハ社員皆欣々タリ、午後一時淺草本願寺ニ来会シテ先生ノ墓ヲ拜スル者無慮二百余名、文部卿府知事亦期セズシテ来臨セラル、法主大教正親カラ渥美「契縁」・鈴木「慧淳」ニ教正以下ヲ率キテ法会ヲ本堂ニ開ク、焼香ハ先生ノ遺族戸主新井古登・社員総代大槻文彦二君ナリ、法会畢リ書院ニ移ル、此二先生ノ肖像ヲ掲グ、重野安禪君先ツ島田重禮君草スル所ノ祭文ヲ朗読ス、次ニ小中村清矩君・星野恒君・成島柳北皆祭文アリ、伶人二十四名・陵王・八仙・太平楽ノ舞曲ヲ奏シ、四時前後広間ニ於テ酒肴ヲ供シ賓主歎ヲ尽クシテ罷ム、亦芸苑ノ一盛事ト謂フ可シ、抑モ幕府二百余年ノ久キ大儒頗ル多シト雖モ其卓見博識超群絶倫ニシテ、心ヲ有用ノ学ニ留メシハ先生ヲ推シテ第一トス宜ナリ、今日ニ及ンテ世ノ宿儒俊士亦之ヲ敬慕スルノ深キヤ、三田蓀光君新タニ先生ノ年譜ヲ著ス、社中采覧異言・折たく柴の記ト共ニ刻シテ之ヲ同志ニ頒カテリ、竹中・鈴木二君相謀リ刻本発売ノ贏利未タ有ラザレトモ本日ノ祭儀ニ於テ社中ヨリ公債証書金百円ヲ先生ノ靈位ニ奠シ之ヲ其遺族ニ与フ、遺族遺産傾キ本日ノ会席ニ出ヅルノ礼服ヲ欠ク、鈴木君又賞ヲ捐テ、新衣ヲ製シ之レニ贈ラル、皆是一大美事ナラズヤ、嗚呼先生ノ学徳後人ヲシテ尊崇セシムルヤ実ニ大ナリ、嗚呼諸君ノ前賢ヲ敬重シ斯文ヲ愛護スルヤ亦厚シト謂フ可シ、此日遺族ノ会スル者喜ビ極ツテ泣ク、会員亦涙ヲ揮フ者多カリキ、記者亦感泣再拜シテ記す

引用史料の冒頭には割注で「明治十四年六月廿一日朝野新聞雜録欄」と書かれており、これが『朝野新聞』の写しだとわかる。また、雜録欄に掲載された記事であることから、執筆したのは同紙雜録欄の名物記者と言われた成島柳北ではないかと推測される。

記事の前半部分から、白石社なる結社によって新井白石の祭典が開催されたことがわかる。当初五月十九日の開催予定だった祭典は、一ヶ月遅れの六月十九日に行われた。祭典は、法会から祭文朗読、舞曲、酒宴の順で執り行われた。さらに、刊本の収益に先立って、白石社より霊前へ公債証書金一〇〇円が供与されたことがわかる。

後半部分では、幕府二百年の間に輩出された「大儒」は多いが、「其卓見博識超群絶倫ニシテ、心ヲ有用ノ学ニ留メシハ先生ヲ推シテ第一」であり、今日におよんでも「世ノ宿儒俊士」から深く「敬慕」されていると書かれ、白石を高く評価している点が注目される。

「白石先生祭典記」のあとには、当日朗読された島田篁村・小中村清矩・成島柳北の祭文が収録されている。²²さらに、その末尾には、次のような朱書がある。

【史料2】『工村々舎叢書』⑧【3】「白石先生祭典ノ記」

本日来会スル者、福岡孝弟（文部卿）・谷干城・神田孝平・北島治房・松田道之（東京府知事）・田中芳男・重野安禎・長松幹・巖谷修・日下部東作・菊池三溪・三嶋毅・股埜琢・鷺津宣光・南摩綱紀・塚本明毅・山東直砥・佐和正・鄭永寧・富永冬樹・星亨・依田百川・小原重哉・大内青巒・嶋地黙雷・小松彰・目賀田種太郎ノ諸君ヲ始メ二百余名ナリ、諸事担当ハ鈴木慧淳・楠潜竜・竹中邦香・大槻修二・同文彦諸君及ヒ本願寺・国文社ノ人々、成嶋柳北等ナリ

一見すると、朱書は元長が祭典に参加して記録したもののように見えるが、実際は、「白石先生祭典ノ記」と同日の『朝野新聞』の雑報欄の記事の写しである。白石の祭典には、当時文部卿であった福岡孝弟・東京府知事の松田道之をはじめ、著名な人物が多数参加していたことがわかる。さらに、本願寺や国文社なる会社が関わっていた点も注目される。

表2 「白石社雑記」内容一覧

| | 内容 | 年月日号 | 細目 |
|----|--------|-------------------------|---|
| 1 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）2月22日2227号雑報 | 白石墳墓の「発見」、祭典・出版の企画 |
| 2 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）3月30日2256号雑報 | 「白石社広告」【史料3】【史料4】 （白石社規則／附言／再白／発起人名） |
| 3 | 書簡一 | 明治14年（1881）4月15日 | 小室元長→鈴木蕙淳【史料5】 |
| 4 | 家蔵書目 | | 小室家所蔵の白石著作の書目・書誌 |
| 5 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）5月15日2296号雑報 | 社中の都合により白石祭典延期 |
| 6 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）6月12日2320号雑報 | 祭典の予定、活字本刊行のこと |
| 7 | 書簡二 | 明治14年（1881）6月20日 | 小室元長→鈴木蕙淳【史料6】 |
| 8 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）6月21日2327号雑報 | 白石祭典開催、来会者名【史料2】※ |
| 9 | 〃 | 〃 | 雑録 「白石先生祭典ノ記」※ |
| 10 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）6月22日2328号雑録 | 小中村清矩「祭白石先生文」※ |
| 11 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）6月23日2329号雑録 | 島田重礼「祭白石先生文」※ |
| 12 | 『朝野新聞』 | 明治14年（1881）6月24日2330号雑録 | 成島柳北「祭白石先生文」※ |
| 13 | 書簡三 | 明治15年（1882）8月 | 小室元長→鈴木蕙淳・三田葆光【史料7】 |

埼玉県立文書館所蔵「白石社雑記」（小室109）および東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『朝野新聞 縮刷版』（ペリかん社、1981～1984）より筆者作成。

※をつけた記事は、埼玉県立文書館所蔵『工村々舎叢書』⑧（小室2990）【3】にも収録されている。

このように多くの人士を祭典の場に集めることとなった白石社とは、いったいどのような結社なのだろうか。管見の限り白石社に関する専論はなく、白石の著作の伝来・刊行に関する記述の中で、あるいは社員だった人物の伝記研究³⁴⁾や出版史研究³⁵⁾の中でその名前が見える程度である。『朝野新聞』中の白石社関係記事については、乾照夫氏が指摘し、明治十五年前後の古書出版ブームとの関わりで、成島柳北の視点から略述している³⁶⁾。それによれば、柳北は、白石社の発起人のひとりだったようである。他に白石社に関する史料はないか小室家文書中に探すと、「白石社雑記 南木廼屋」と表紙に書かれた編纂物が見つかった。

二 「白石社雑誌」の分析

(一) 白石社の新聞記事

「白石社雑誌」(小室109)の表紙をめくると、版心に「如達草堂」の文字の入った朱色野紙が現れる。そこには、白石の墳墓が、浅草本願寺寺中の真福寺で「発見」されたという『朝野新聞』の記事が筆写されている【表2「白石社雑誌」内容一覧】。そして、その一ヶ月後に同紙に掲載された白石社の広告が続く。

【史料3】「白石社雑誌」 白石社広告 明治十四年三月三十日

白石新井先生の学植八人の知る所なり、先生著す所の書も亦無慮一百七八十部の多きに至る、皆有用の述作にして議論記事ハ快通高妙、典故考証ハ明晰精確なり、然るに其多くハ謄写以て世に伝へ棗梓に付するもの僅々十数部に過ぎず、豈遺憾に堪ふべけんや、近日同志相議し其写本の世に伝ふるものを始め、官庫に秘蔵するものも請ひ、毎部一千を限り漸次活字に印し以て世に公にせんとす、亦是ハ有益の事業なりと信ず、且つ先生の墳墓浅草本願寺中真福寺の側にあるもの近来頗る敗壞せり、因て寺僧に就きて先生の後嗣を索しに、今の戸主新井古登と称し寡婦幼女等々相依り落魄して下谷二長町の某家に寄寓すと云、噫文学に深き偉業の多き先生の如くにして其後嗣の衰茶此に至る何そ天の之に福するの薄きや、依て今回先生の著書を印刷発売し其得る所の余贏を挙て半ハ以て其墳墓を修め永く祠堂の祭祀を存せしめ、半ハ以て其後嗣の生計に充てんとす、抑子孫の傾敗せんとするに当り其祖先著作の利を以てこれを支ふるを得る、是洵に一美事なり、冀くハ同情の諸君此挙に協力あれ、其綱則の如きハ下文の条款書に具記するか如し

白石の「学植八人の知る所」であり、著作は一八〇部にもほる。それらは「皆有用の述作」で、「議論記事ハ快

通高妙」、「典故考証ハ明晰精確」と高く評価されている。その多くは、写本として伝わっているものであり、刊行されたのは十数部に過ぎない。そこで、「同志」で相談して、写本を集め、活字出版することとなったと、設立の経緯が書かれる。

引用箇所が続く「白石社規則」には、社の取り決めが書かれている。白石社は「白石新井先生の学徳を景慕するもの」が集まって、祭祀を執り行い、あわせて白石の著作を「江湖」に「保続」させるために結成された（一条）。社員は、約千名を目標としているが、実働人数は社員惣代一名と世話掛数名（二条）と少ない。事務は、東京神田区淡路町二丁目四番地にあった国文社³⁹内で行う（三条）。白石の著作のうち未刊行のものについては、すべて白石社が刊行することを相続人の新井琴より許可を得ており、今後、刊行する書については、必ず白石社が版權を有し、その權利を社員全員で共有する（四条）。今後刊行する著書の書名・価格は、新聞紙等の手段によって社員に公告する（五条）。収益の半分は、墳墓の修復・祭祀費に、残金を子孫の生活費に充てる（六条）。毎年五月十九日に東京浅草本願寺で祭典を開催する。社員は、誰でも参加可能である（七条）。例祭の日に社員一同の投票によって、総代を選（八条）。「徳義上」からできた結社であるから、惣代・世話掛等に俸給は出さない（九条）。

規則の後の「附言」では、当面の社員総代を浅草本願寺の鈴木慧淳⁴⁰（真宗大谷派・？—一八八六）に任せることと共に、『采覧異言』と『折たく柴の記』の刊行予告が載せられ、「社員に加盟を望まる、諸君ハ来る四月十日までに神田淡路町国文社まで住所姓名并に前記二書購買の部数を御報道あらむことを望む」と記されている。

さらに、「再白」では、「先生の著書を追々出版するに付てハ数部の原本を蒐集して校合致し度」として、白石社が探索している書目が列記されている。元長は、書目のうち自分が所蔵しているものに朱点を付けている。また、欄外には、「国喪正議ハ室新助ノ著ナリ」「奉命教諭の」論恐論誤」等の朱書が見られ、作者や書名の誤謬を指摘してい

る。

広告の末尾には、六七名の「発起人名」が記される（元長の筆写では、八木雛・馬屋原彰・藤野正啓の名前が脱落している）。

【史料4】「白石社雑記」 白石社広告 発起人名 明治十四年三月三十日

巖谷修「二六」 石崎謙 磯村定之 林正明 西周 西尾為忠 甫喜山景雄 星亨 星野恒 星野寿平

大槻修二「如電」 大槻文彦 岡千仞「鹿門」 大内青巒 尾越蕃輔 小栗憲一 小野義真 乙部鼎 大川通文

神田孝平 亀谷行「省軒」 川田剛「甕江」 河村淡 柏木貨一郎 依田百川「学海」 四谷恒之 竹中邦香

高橋健三 高橋基一 成島柳北 中村正直 長松幹 南摩綱記 村山徳淳 宇都野正武 野口常共 能川登

楠潜竜

熊谷武五郎 黒川真頼 子安峻 小牧昌業 小中村清矩 近藤瓶城 江間三吉 寺西成器 渥美契縁 新井政毅

櫻井能監 木村正辞 由良守應 目賀田種太郎 箕作秋坪 箕作麟祥 三田葆光 宮永荘正 重野安繹「成斎」

嶋田重禮「篁村」 島地黙雷 白峰駿馬 広瀬進一 鈴木慧淳 菅正友 末廣重恭「鉄腸」

太字で示したのは、明治十三年（一八八〇）に岩倉具視が、谷干城等とともに創設した斯文会学会に所属している人物である。さらに政府の修史事業に関わった人物には下線を引いた。彼らの多くは、草創期の政府諸官庁や近代アカデミズムにおいて活躍していく人々である。

一方で、熊谷武五郎・子安峻・竹中邦香・島地黙雷・中村正直・目賀田種太郎・林正明・南摩綱記等は、明治十三（一八八〇）に慶応義塾関係者によって設立された社交クラブ・交詢社の社員でもあり、そうした都市知識人結社のネットワーク関係による交友も基底にあるのではないかと考えられる。

さらに、社員総代を任された鈴木慧淳に加えて、小栗憲一・渥美契縁あつみ かいえん・楠潜竜（以上、真宗大谷派）や、島地黙雷（真宗本願寺派）、そして大内青巒等、真宗僧や仏教学者が加わっている点も注目される。彼らの多くは、明治二十年代にかけて雑誌の発刊や結社の設立を担っていく人々であり、そのようなノウハウをもった人々が参加した意義も大きかったのではないだろうか。

このように白石社には、漢学者を中心として様々な人物が結集していた。ただし、実際の事業を担っていたのは、【史料2】に「諸事担当」として名前の見える鈴木慧淳・竹中邦香・大槻修二・大槻文彦等であったと考えられる。彼ら以外の発起人が一堂に会する機会はなく、祭典も全員が参加していた訳ではない点には留意する必要がある。

（二）白石社への手紙

「白石社雑記」には、新聞記事の写しの間に、元長が白石社の社員へ送った書状の控えが三通綴じられている。一通目は、本稿の冒頭で一部を引用した史料である。宛名にあった「鈴木少教正閣下」とは、鈴木慧淳のことであった。長文のため、内容ごとに①②③に分けて読んでいきたい。

【史料5-①】「白石社雑記」書簡一 明治十四年四月十五日

此度諸大家被御申合白石社規則御廣告被成客月卅日朝野新聞及本月五日交詢社雜誌附録ニ於テ謹而領承、実以千歳ノ一会無前之広慈難有事ニ御座候、老拙無似といへとも、故有て十七歳ノ昔より六十（文政壬午生）ノ今日ニ至リ先生を欽慕すること一日ノ如く、其遺著搜索ニ心を尽候得共、何分僻陋独力ノ致す所僅ニ数種ニ過ぎず、然ルニ去ル十一月以降悪性ノレウマチスニ罹リ医業無功右腕強直、左膝又次之自ら筆を采る能はず（時トシテ管ヲ姆食ニ指ノ間ニ挿ミ左ノ掌ヲ添テ本紙ノ如ク引スル回す事あり、嘗有詩紙窓影上梅花月一笑横斜似家出蓋紀其実

也) 百事之被為二萎靡シ纔ニ残喘余息ヲ送候処、刻ニ図らず美氣ニ際遭シ素願円満致シ候は誠ニ望外之大幸ニ奉存候

『朝野新聞』および『交詢雜誌』に掲載された広告⁽⁴⁾で白石社の活動を知った元長は、「千歳ノ一会無前之広慈」に感謝したいと書き始める。それには比ぶべくもないが、自分も「故有て」十七歳のとき(天保九年・一八三八)から六十歳の今日(明治十四年・一八八二)に至るまで、白石先生を「欽慕」し続け、遺著の探索に心を尽くしてきた。ところが、昨年の一月に悪性のリウマチにかかり、筆をとることさえもできない状態で、すべてに「萎靡」してかろうじて生きているような状態だった。それが白石社の「美氣」のおかげで図らずも「素願円満」して「誠ニ望外之大幸」であると喜びをあらわにしている。

【史料5-②】「白石社雜記」書簡一 明治十四年四月十五日

別紙目録大抵世上流布之書ニ付御需用ニ不足者ト確認致シ候得共、其中古史通或問ハ故加賀宰相殿開闢以來第一部ノ書ト御称美被成候由承候間、保存ノ為客歲三月管庁を経圖書局へ嘉納致置候、尤其節家本ノ衆へも一応及協議候御府下心当リ探訪致候得共、綜跡相分り不申無抛專断を以取計候処、御広告ニ抛リ諸家ノ近況をも承知致候、其寡婦トハ新井源八郎殿(古史通出版人)未亡人ニも御座候哉、迎モノ事ニ詳細伺置度候、又朝鮮聘事録及録余ハ先生ノ手に成候者哉否ハ不存候得共、正徳聘事ニ於テハ事細大トなく羅網致候者ニ付万一御用ニ候ハ、御沙汰次第自費を以遁送可仕候

「古史通或問」は、白石の「開闢以來第一部ノ書」と評価されていることを聞いていたので、「保存ノ為」昨年三月に管庁を経て内務省図書局へ「嘉納」した。その際、「家本ノ衆」へも一応「協議」しようと東京で心当りの場所を探してみたが見つけられず、専断で処理せざるを得なかった。だが今回、白石社の広告によって白石の子孫の近況も

知ることができた。また、家蔵の『朝鮮聘事録』と『朝鮮聘事録余』（小室2547~2550）は白石の著作かわからないが、「正徳聘事」について網羅している書なので、もし必要であれば自費負担で送つてもよい。本書簡の末尾には、「家蔵書目」が付され、白石社で入手できていない書があれば、提供する姿勢をみせている。

【史料5-③】「白石社雜記」書簡一 明治十四年四月十五日

兼テ先生ノ墓ハ報恩寺ニ在リト承候間（鳩巢年譜云、享保乙巳云々五月八日新井筑後守中症全十九日死去即日申ニ至ル廿一日葬於淺草報恩寺余カ名代トシテ忠三郎寺ニ至ル）過ル「明治」八年五月十七日御地内へ罷越伺候処、あれハ寺中トハ申モノ、実ハ田原町ニ在リト御差函ニ付同寺へ参り承候へハ、爰許ニあらん北松山町高德寺（十二番地）へ参り尋へしとの事ニより再び元の道を戻り、高德寺（門に荒居山といふ額ヲ掲ク）へ居り込、主僧新井祐海師ニ面謁ヲ請候処、粗人トや思はずらん（此時老生風邪後浴ヲ怠リ蓬髮垢面大額巨眼四尺、衣服不掩外踝瘦骨稜々似月仙所画人物）有客トテ被断、詮術なく門番を案内ニ頼て遍く寺中を探しニ僧蔵氏以下ノ墓ハあれとも先生ノ碑石ハなし、塩懲もなく再び玄関ニ進ミ叩頭再拜其顛末を口説し候（此間婦人の声ウルサヒネーと聞へしハ誰か事なるか、食をねたりし猫児を叱りにや）暫有てそれならハ円照寺を尋ねて見よとの答ニ付、仰る如くニ同寺（月輪山ト号し庭に鍔鏡の釣瓶井戸ありし）を訪ひ主人兼英師ニ在りし事とも物語せる處、それハく計ニ而爰より雛僧を添られ真福寺ニ至り初て拝掲するを得たり、其節ハ囲ヒノ板塀破レ居、其破レし所より墓所へ通行セリ、近キ比人の詣てしとも見へす草茫々と生茂り、大塚なる儒者捨場と同日の觀をなせるハ勿体なき事也

墓図ハ享和三年堤朝風の著せし白石先生著述書目附録ニも見へ候得共、普通之制と異なるハ定而故実のある事なるへし

右之外親數得拜顔何度義又申上度義も御座候へとも前にも申述候通疫疾其事難行書申二而其思ふ半をも尽し不申、動もすれハ語氣自贅ケ間敷走り第一位発起第三十位先生ノ謹責も畏て且長文御退屈も恐入候間客筆候、不具謹空書簡の後半は、明治ゼロ年代に元長が行った白石墓の探索について書かれている。以前から『鳩巢年譜』(小室2628)等によって、白石の墓が報恩寺にあることを知っていた元長は、明治八年五月十七日に同寺へ赴いた。しかし、そこに墓はなく、高德寺、円照寺とたらい回しにされ、ようやく浅草本願寺寺中の真福寺で白石の墓にめぐり会うことができた。訪れる人のいない白石の墓所は荒れ果てており、大塚の「儒者捨場と同日の觀をなせるハ勿体なき事也」と、元長は嘆いている。『朝野新聞』で話題となる五年以上前に、元長は墓の探索を行っていたのである。

【史料6】「白石社雜記」書簡二 明治十四年六月二十日

昨十九日慈清院殿追祭ハ折能クモ大法主様御患上ニ際シ当日大導師ノ請求御承諾被下候義ハ本社案内状ニ於テ拝承セリ、此ノ日ヤ天氣開晴微風不起塵朝野ノ紳士輻輳御臨場ノ御事ト奉存候、抑白石生前ノ偉業ハ姑置死後百五十七年の今日新ル幽光ヲ発シ、且是子孫ノ衰茶ヲ振恤ヤラル、実ニ台下率先御尽力アラスンハ誰カ能為ス事ヲ得ンヤ、僕比日疾激発臥生牀ニ在リ、同盟峰岸重行不幸母ノ喪籠リ共ニ盛会ニ參スル能ハス、感銘ノ余リ他筆ヲ得リテ聊鳴謝ノ意ヲ表ス

一ヶ月後、元長は再び慧淳へ書簡を送っている。六月十九日の白石追悼祭当日、元長は病状が激しく、床について祭典には参加できなかつたものの、白石の「生前ノ偉業ハ」「死後百五十七年の今日新ル幽光ヲ発シ」、子孫の衰微を救うに至つたのは、率先して尽力した慧淳のおかげであると記している。

【史料7】「白石社雜記」書簡三 明治十五年八月

本社客歳刊行ノ白石先生年譜考証精校、成嶋氏稱為有用之書実ニ溢美ニあらず奉存候、其中先生の旧采地本郡越

畑奈良梨二ヶ村ハ姑置、埼玉郡野平村ハ里数も隔リ（拾壹里）且古写本折焚柴記多ク野平・野寸・野手本ニ作り頗渉類似候間、近曾本県編輯掛へ質問ニ及事実取調候処、全ク野牛村ニ相違無御座候、然上は這回高明ヲ仮ラスンハ他日正誤形ヲ失セン、病中絶而他事ヲ借り及陳固陋之言敢浼函丈幸ニ嘉納セラレン事ヲ請フ、頓首再行

埼玉県下

武蔵国比企郡番匠村

社末

小室元長

さらに翌年の八月の本書状は、慧淳と三田葆光（一八二五—一九〇七）宛である。元長は、前年に白石社から刊行された葆光の『白石先生年譜』について高く評価したうえで、その誤りを指摘する。引用文の後には、参考史料として、『新編武蔵風土記稿』の「野牛村総論」の写しが添付されている。

ここで注目されるのは、元長が肩書に「社末」と記している点である。家蔵本や情報の提供を申し出るなど白石社に積極的に関わっていかうとする姿勢をとっていた元長は、社の末端に連なる者という意識を持っていたのではないかと考えられるのである。

(三) 白石著作の献本と貸借

【史料5-②】に記されていた「古史通或問」の内務省への献納については、芳賀明子氏が関係する書簡史料を紹介している。⁴⁷以下、これを参考にしつつ、新たな史料を加えて元長による献本の周辺を追いたい。

明治十二年、元長は、家蔵の白石著作を国へ献本することを思い立つ。八月十八日付の山崎周敬からの書簡には、周敬と内務省図書局長の何礼之（一八四〇—一九二三）との間でやりとりした書類の写しが綴じ込まれている。それ

らから、元長が当時、内務省九等属で駅通局に務めていた周敬を通して、内務省図書局へ「古史通」と「古史通或問」の献本を図っていたことがわかる。⁽⁴⁸⁾

献本にあたっては、明治九年に埼玉県第一課備となり、『埼玉県史料』の編修を担当した芳川恭助⁽⁴⁹⁾（一八二五—一八八六）が上申書を添削している。申請後に恭助が内意を伺ったところ、「古史通」については既に刊行されているため見合わせ、「古史通或問」のみ献納してほしいとの意向であることがわかった。恭助は、元長の挙について、昨年「鎌倉大草紙」を献納した上に、今回「古史通」を献納されるとは、「篤志之段御奇特之事」と述べている。

久米田村（現吉見町）の豪農・内山作信⁽⁵¹⁾（一八一六—一八八七）も、上申書の添削を行っていた人物である。作信も書簡の中で「鎌倉大草紙」に続けての献本を「御厚志之段敬服仕候」と称賛している。さらに、数ヶ月後には、「古史通」「古史通或問」「史疑」の三部作は、「別而宜敷もの」とかねて聞いているが、読んだことがなく「御蔵書ニ御富被成御浦山敷奉存候」と記している。⁽⁵²⁾ 要望を受けた元長は、翌明治十四年の四月に「古史通」と「古史通或問」を作信へ貸し出している。両書を受け取った作信は、活字本のない「古史通或問」については、老齢にはつらい作業ではあっても「憤発抄録」すべきものと認識しており、⁽⁵³⁾ 興味深い。作信は、他にも『藩翰譜⁽⁵⁴⁾』や白石社刊行の『白石先生年譜⁽⁵⁵⁾』などを借り出しており、白石の著作が好古仲間の間で貸借されていたことが確認できる。

また元長は、隣村の峰岸重行⁽⁵⁶⁾（一八二七—一八八七）にも上申書の添削を依頼している。⁽⁵⁷⁾ 元長による白石著作の献本は、多くの好古仲間の協力と称賛を得て行われていたのである。

三 白石社設立までとその後

(一) 墓の探索から白石社まで

白石社の設立に至るまでの周辺を小室家文書中の他の史料から探ってみたい。明治ゼロ年代半ば、リウマチを患った元長は、明治七年（一八七四）から十年（一八七七）にかけて、毎年熱海・箱根へ湯治旅行へ行き、三冊の紀行文を遺している。このうち、明治八年（一八七五）四月十六日から五月二十五日までの旅を記したものが『熱海再遊簿』（小室271.2）にある。

【史料8】『熱海再遊簿』明治八年五月十七日条

十七日〔己卯月曜〕「中略」本願寺中月輪山円照寺〔住持兼英〕に新井築州の墓を吊す

伝に平蔵・尚之進二氏ノ墓石もあり、又浅草北松山町拾貳番地荒居山高徳寺新井祐海か許に新井氏代々の墳墓あり、是ハ過キシ年田原町報恩寺ヨリ改葬ノ由、其原由ヲ知らず

これを見ると、熱海からの帰路、東京に寄った元長は、五月十七日に本願寺中月輪山円照寺の白石墓に参拝している。この日の記事には、白石墓の図が描かれている。しかし、当該図は、現地で墓をスケッチしたものではなく、堤朝風編『白石先生著述書目并附録』（小室273.4）掲載の図とほぼ同一のものである。慧淳への書簡でも言及していたことから（【史料5-1】③【波線部分】）、元長は帰宅後、紀行文を清書する際に同書の図を模写したものと考えられる。

明治十年代に入ると、リウマチの悪化により元長は体の自由がきかなくなっていた。しかし、自身の代わりに好古仲間であった浅草の骨董商・畠山如心齋（?—一八八三）に白石の墓の探索を依頼している。如心齋からの書簡にお

いて、初めて白石の墓の話題が出るのは、明治十三年（一八八〇）二月五日付の書簡であるが、墓の探索に進展がみられたのは、一年三ヶ月経った五月。それも白石の命日の前日であった。

【史料9】「畠山手簡」書簡35 明治十四年五月十八日

抑白石先生ノ遺書ヲ活板ニスルノ起ハ兼而白石先生ノ墓所ト子孫ノ在所トノ取調方ヲ卑生老先生ヨリ御依頼ヲ受候処、能手懸りもナク御答も追々ト延引シ心ニ懸り居候故、友人鈴木慧淳ハ東本願寺ノ重役ナリ、是二問ハ、明瞭ニ知ラル、事も有ン坎ト、去年一日閑話ノ際此事ニ及ビシガ、同人答ニ、サレバヨ白石ノ墓ノ我管轄地内ニ在リト云事モ余ハ嘗テ知ラザリシニ、不計モ他人二問ハル、事ノ有テヨリ其实地探リ初テ承知セリト云、又子孫ノ所在ハト問フニ、是ハ尚以知ラヌ事也シガ、一友人ニ甚ダ白石信仰ノ者アリテ、其家ノ成行迄ヲ粗心得タリ、其者ヨリ聞ケル赴「趣」ニ依レハ、先生ノ跡、當時下谷ニ長町芝居ノ少シ西ノ方ニ借家住居シテ、男子幼少ナレハ其母ナル後家戸主ト成居ルトノ事ナレトモ、亡父（按ニ源五郎坎）存生中行跡不宜貧困ヲ極メ、且不孝ニテ先祖ノ年回供養ハ勿論、寺ノ附届モセズ、剩ヘ菩提所ノ什物ナル白石ノ遺物若干ヲ偽テ貸出シ之ヲ消却シテ不返等ノ惡事不少シヨリ、今も其後家子供共ニ容ラレズ而増々活計ニ困難シ、随テ後家ノ心意モ不宜成、子も行末見留難キ人品也トゾ、余初て右ノ如ク白石先生ノ墓ノ在所ヲ知り、又其子孫ノ貧困且孝ナラズシテ逆モ先祖ノ墓等ヲ保存スル能ハサルヲ察シ、嘆息ノ余リ責ニ迫リ、白「石」先生ノ墓石丈ハ保存センノ念ヲ起ストイヘトモ、若有志輩等ヲ募リ集金シテ寺ニ預ケ置カハ、彼母子ノ困難ヲ訴フベシ、是等屢々及ブ時ハ、終ニ墓石保存ノ法モ立難キニ至ラン坎ト、於是「二ノ同士ト熟議シ、遂ニ先生ノ遺書ヲ活板トシ、夫ヲ有志家ニ買ハセ、其利潤ヲ積テ先生ノ墓及年回ノ法会ヲ保存シ、又利潤中何分坎ヲ売書ノ税トシテ其家ニ送ランニハ、自カラ両全ヲ得ベキ坎ト云ニ昨今決シタルガ、此方法又如何可有哉ト云ニ、卑生此方法ヲ甚善トシテ、時宜ニ寄ラバ卑生モ又傍其件ニ従事セ

ン事ヲ約セシニ、其後互ニ多事ナルヲ以、数月間面語も打絶へ、未中々其運ビニハ至ラヌ事ト思ヒキヤ、老先生よりノ御依頼ヲ承リシ日、朝野「新聞」ノ記載面ハ知ラザレトモ、果シテ其事ト愚推仕候ハ、全ク既ニ此一条ノ訳アルニ依テ也、且又御両氏にハ（老先生併峯岸「重行」君ヲサス）御入社ノ確証ハ未心得不申候え共、最初貴殿へ（卑生ヲサス）御依頼ノ上、両御名へ宛懇ニ御投書申上候之積ノ御事故、いかにも白石御ひるきの御方ト被察、然ル上ハ入社ニ相違ナキ者ト見ナシ、以後活本出来ノ都度、一部ツ、ハ屹ト御廻シ可申上、「中略」但、此節初て承知仕候ニ、過日同氏へ向ケ御郵書ニ而白石先生ニ関候件々御懇切ニ照会等も被為在候内ニ而、同氏も深く感伏ノ趣委細ニ同氏より吐露有之候

如心齋は、元長から白石の墓所と子孫の所在調査の依頼を受けていたが、手がかりもなかったため、友人であった浅草本願寺の鈴木慧淳に尋ねた。慧淳も以前は墓の所在を知らなかったが、「他人」に尋ねられてはじめて「実地」で探索し、本願寺の管轄地内にあることを「発見」するに至ったという。子孫の現状についても、慧淳の友人に「甚ダ白石信仰ノ者」（文彦や邦香等後に白石社の中心となる人物ではないかと推測される）がいて、あらましを知った。子孫は困窮しており、先祖に対して孝行でなく、白石の墓を保存する能力がないことを慧淳の話で知った如心齋は、「嘆息ノ余り責ニ迫り、白「石」先生ノ墓石丈ハ保存センノ念ヲ起」した。そこで、「一二ノ同士」と熟議して、白石の「遺書」を活字出版し、それを「有志家」に購入してもらい、その利潤を積んで白石の墓と年回の法会を保存し、一部を子孫の家に送ることを決議した。しかし、その後は忙しさにかまけて会うこともできなかった。どうやら計画は、如心齋の知らないところで始動していたようであり、元長から確認の依頼を受けてはじめて気づいた。確認の依頼とは、白石社への入社についてであった。慧淳は、元長および友人の峰岸重行が入社したという確証は得ていないが、「いかにも白石御ひるきの御方」と察して「入社ニ相違ナキ者ト見ナシ」、以後は活字本の刊行の都度送るよう

することであった。

書簡の後半には、元長が慧淳へ送った書簡【史料5-1①】のことについても言及されている。新聞で白石社の活動を知っていた元長は、慧淳と面識がなかったにも関わらず、直接郵便を送りつけていたのである。「御懇切ニ照会等」もされていて、慧淳もその熱心さに「深く感伏」していたと如心斎は記している。

さらに一ヶ月後の六月十八日付の書簡⁶¹⁾では、白石社の活字本刊行の遅延や慧淳との文通の件について書かれ、白石墓探索の成果として、図面を二枚添付している。そして、白石の墓の位置・移転の可能性など様々に検討を行っている。

(二) 白石社のその後

明治十四年六月十九日の祭典実施後、『東京日日新聞』に白石社刊行書の広告が掲載されていく。⁶¹⁾

以下に列記すると、明治十四年八月九日『折たく柴の記』『采覧異言』、同九月十六日『白石先生年譜』、明治十五年五月十六日『西洋紀聞』、明治十六年一月十三日『折たく柴の記』『采覧異言』『白石先生年譜』『西洋紀聞』『五事略』、明治十六年五月十五日『五事略』となる。

しかし、その後白石社の広告は『東京日日新聞』に確認できなくなる。再び現れるのは、明治二十一年（一八八八）である。同年九月九日の『折たく柴の記』の広告では、発行所が「東京小石川伝通院前 書肆 雁金屋清吉」となっており、「東京神田淡路町国文社内 白石社」から変更されている。明治十七年以降、白石社はどうなっていたのであろうか。

白石社のその後を示す史料は多くない。ここでは、発起人の一人で、漢学者・演劇評論家として有名な依田学海⁶²⁾

(一八三四—一九〇九)の日記を手がかりとしたい。

『学海日録』の明治十六年一月十七日条には、「国文社の幹事竹中邦香、負債の事によりて社をしぞきたりければ」と、邦香が国文社を退職した旨が記される。さらに、十九年(一八八六)十二月には、次のような記述がある。

【史料10】『学海日録』明治十九年(一八八六)十二月二十二日条

大槻修二来りて、末広重恭氏が雪中梅の小説をかし与えぬ。いろ／＼の物語となるに、又かの本願寺鈴木慧淳の事に及ぶ。この人去る程死して遺族困窮するよしにて、修二此が為に朋友に金を聚めてこれをおくりき。⁶⁴

白石社における功績を評価されていた慧淳が亡くなってしまったのである。

小室家文書中の『訂正増訳采覧異言』巻之一(小室333)には、明治十六年五月付の白石社からの印刷物が挟み込まれている。

【史料11】『訂正増訳采覧異言』巻之一(小室333) 挟込み文書 明治十六年五月

本社之義今般都合モ有之、尾張町式丁目拾四番地(潤生舎)内へ転居致候、就テハ刊行書之義モ一層勉強致シ時々発行可致候間、社員諸君ニ於テモ尚更社員新入之義御誘導被下度、且又毎年之白石祭ハ執行可仕候得共、社員總會之義ハ自然多分ノ冗費モ相掛リ候次第ニテ且年々總會ニモ及間敷、例祭ハ総代・親類等ノミト致シ年回等之節大祭執行致ス事ニ決定致候、依テ右等之費用ハ精々節減致シ専ラ力ヲ出版之方へ相向ケ度ト存候間、此段御報道申上候也

白石社は、「今般都合モ有之」(国文社で事務を行えなくなったことを指すカ)、尾張町二丁目十四番地の潤生舎へ転居した。社員各位には一層新入社員の勧誘を願いたい。また、「白石祭」は総代・親類等のみで行い、年回等のときに大祭を執行する形とし、總會等の冗費を節減、出版に力を振向けたいと記されている。白石社は明治十六年の時

点で早くも活動を縮小させているのである。

それから約十年後の明治二十七年（一八九四）に刊行された大槻如電校訂『校刻藩翰譜』⁶⁵には、見返しに「白石社」とあるものの、発行所は国文社ではない。発行者は吉川半七（一八三九—一九〇二）、印刷者は野村宗十郎、印刷所は株式会社東京築地活版製造所となっている。同書の例言には、「明治十四年、本社創立の当時より、此書を校訂上版せんとし」たが、「其完成を告げず、本社も亦尋て印行等の事を、中止するに至りて、数年を送れり」との記述がある。白石社は、数年間出版を行えない状況にあり、『校刻藩翰譜』は久しぶりの刊行書であつたことがうかがえる。

このように、発行所を変えながら、出版活動は二十年代終盤まで断続的に続けていたものの、明治十六年以降には、中心人物の退職や死没などもあり、結社としての経営は難しかったことが推測される。

一方で、明治二十年代の雑誌や書籍に目を向けると、様々な雑誌に白石に関する多くの論文が寄せられ、白石の伝記も書かれるようになる（本稿末尾の【白石関係著作出版略年表】を参照のこと）。

さらに、明治三十八年から四十年（一九〇五—一九〇七）にかけては、『新井白石全集』全六巻が国書刊行会から刊行される。編輯兼校訂者の今泉定助⁶⁷（一八六三—一九四四）は、『故実叢書』⁶⁸の刊行をはじめ古典籍の保存に努めた人物である。また、奥付を確認すると、発行者は吉川半七、印刷者は野村宗十郎、印刷所は株式会社東京築地活版製造所であり、『校刻藩翰譜』と同様となっている。例言を見ると、萩野由之（一八六〇—一九二四）や上田万年（一八六七—一九三七）等とともに、大槻如電・文彦が蔵書の提供や校訂の指導を行っていることがわかる。

また、『新井白石全集』では、『藩翰譜』（一巻）、『折たく柴の記』『五事略』（三巻）、『西洋紀聞』『采覧異言』（五巻）のいずれもが白石社本を底本として使用している。さらに、一巻には如電の「藩翰譜系図」、六巻には葆光の

『白石先生年譜』を付している。

このように『新井白石全集』の刊行は、白石社を引き継ぐものであったのである。

おわりに

ここまで、小室家文書中の蔵書と編纂物の分析によって、埼玉の「好古家」小室元長による白石著作の蒐集について検討してきた。そこから浮かび上がってきたのは、白石社の活動と元長ら「好古家」との関係である。

元長は、天保期から白石の著作の蒐集を始め、明治十年代に至るまで校正・編集を続けていた。さらに、明治十三年には、「鎌倉大草紙」に続いて「古史通或問」を内務省図書局へ献納している。その目的は、「保存ノ為」であり、好古仲間もその挙を「御奇特之事」と称賛していた。

明治十年代半ば、老齢や病もあって、個人による蒐集・校正の限界を感じていた元長にとって白石社の結成は、まさに年来の本願を実現してくれた「望外之大幸」であった。そのため、家蔵書や情報の提供を申し出るなど社の末端に連なる「社末」として、積極的に関わっていかうとする姿勢を示したのではないかと考えられる。

書簡の分析からはさらに、子孫と墓の現状を知って「白「石」先生ノ墓石丈ハ保存セン」と奮い立ったものの、結果的に白石社の結成には乗り遅れた畠山如心齋のような「好古家」の存在が明らかになった。白石社のような活動を望んでいたのは、発起人に名前を連ねた著名な人々だけではなかったのである。

これらの事例を鑑みると、白石社は、明治十年代に突如現れたのではなく、その前提として、幕末期から続いていた「好古家」による蒐集活動があったと考えられるのではないだろうか。

白石社は、祭典を執り行い、白石の著作を「江湖」に「保続」させるため、そして子孫の救恤のために明治十四年

に設置された。そこに集ったのは、漢学者をはじめとした様々な人物たちであり、後年、政界・学界で活躍していく錚々たるメンバーであった。その顔ぶれからは、政府の修史事業や都市知識人結社との関係が考えられたが、発起人のネットワークについては、検討を加えることができなかった。この点については、今後分析を深めていく必要がある。結社としての活動は、必ずしも長くは続かなかったものの、元長が『朝野新聞』や『交詢雑誌』からその活動と白石の子孫の動向を知ったように、白石社は、新聞・雑誌による宣伝により、全国的に白石の著作と白石の墓について知らしめることになったと考えられる。

白石研究の第一人者である宮崎道生氏は、白石の著作が大量に出版され、一般に広がっていったのは幕末以降のことであると指摘しているが、本稿での分析を踏まえれば、組織的に白石の著書が刊行されていく画期のひとつは、明治十四年（一八八一）の白石社の結成にあつたと言える。

白石社の出版活動は明治二十年代で終焉を迎えるが、その後、三十年代後半の『新井白石全集』の刊行に継承されていく。白石社が活字化した『折たく柴の記』『西洋紀聞』『藩翰譜』などの著作は、現代に至るまで大系本・叢書・文庫など様々な形で出版されている。明治十年代から二十年代における白石社の活動は、白石の著作が後の時代へと引き継がれる契機となったのである。

さらに宮崎氏は、アカデミズム史学の草創期を担った漢学者・重野安繹（一八二七—一九一〇）が、明治二十三年（一八九〇）に東京学士会院で行った講演「学問は遂に考証に帰す」において、考証家の巨擘として、林羅山、徳川光圀について新井白石の名を挙げていることを指摘している。⁷⁰ その安繹も白石社の発起人のひとりであった。

成島柳北の筆になると推測した「白石先生祭典ノ記」には、「心ヲ有用ノ学ニ留メシハ先生ヲ推シテ第一」とすると書かれていた。「白石先生祭典ノ記」を『工村々舎叢書』と「白石社雑記」に筆写していた元長も明治十五年八月

の鈴木慧淳と三田葆光宛の書簡で、『白石先生年譜』は「考証」が「精校」であり、柳北が「有用之書」と賞賛するのにも褒め過ぎではないと記していた（『史料7』波線部分）。同じく白石社の発起人だった依田学海も、明治二十二年（一八八九）の『国民之友』において「先生が学問は経済実用を主として。徒に文辞考証の類にあらず」と称賛している。²²

一方で、幕末に目を向けると、『甘雨亭叢書』を刊行した上野安中藩主・板倉勝明（一八〇九—一八五七）も「多是国家有用之書」と白石の著作を評価している。²³ また、滝沢馬琴（一七六七—一八四八）は、天保三年（一八三二）十二月八日付の小津桂窓宛書簡で次のように記している。

白石先生御信仰のよし、たのもしく奉存候、儒流にて尤も有用の学者に候間、老拙も壮年より信用いたし候²⁴ である。このように、幕末期においても、白石を「信仰」し、彼の学問を「有用」という点から評価していた人々がいたのである。

大沼宜規氏は、近代実証主義史学が形成されてゆく一方で、官省などにおける「経済有用」を歴史考証の目的とする人々が存在したことを指摘している。²⁵ 氏の指摘を踏まえれば、幕末から明治二十年代という時代状況の中で、白石は「有用ノ学」を第一とした学者として高く評価されていたと考えられるのである。当該期において、なぜ白石に対する評価が高まっていたのか、あるいは発起人と「社末」の間での意識差等についても考察していく必要がある。

そもそも元長は、なぜ十七歳の頃から白石を「欽慕」するようになったのか。この謎は解けていない。蒐集するだけでなく、前時代を生きた学者に憧れる存在としての「好古家」という視点も分析の俎上に上げていかなければならない。以上は、今後の課題である。

付記 本稿は、二〇一七年九月二十二日に奈良女子大学で開催された日本思想文化史院生報告会における報告「明治10年代における「好古家」の新井白石受容」がもととなっている。当日は、小路田泰直氏・佐藤弘夫氏をはじめ多くの方から貴重なご意見をいただいた。また、『学海日録』における白石社の記述について、稲岡勝氏より情報提供を受けた。末筆ではあるが、厚くお礼を申し上げたい。

注

- (1) 埼玉県立文書館所蔵「白石社雑記」(小室109) 収録書簡一。
- (2) 忍藩藩儒。常陸国潮来生れ。山本北山に漢学を学ぶ。文政九年(一八二六)に忍藩校進修館へ招かれた(村山吉廣『忍藩儒 芳川波山の生涯と詩業』明徳出版社、二〇〇九)。
- (3) 二一三七号雑報欄。以下、『朝野新聞』からの引用は、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫編『朝野新聞 縮刷版』(ペリかん社、一九八一—一九八四)による。
- (4) 先行研究においては、矢田部良吉がエドワード・モース *Shell Mounds of Omori* (『大森介墟古物編』)を翻訳した際に“*Gentlemen interested in archeology*”の訳語として使ったとされている(鈴木廣之『好古家たちの19世紀—幕末明治における《物》のアルケオロジ』吉川弘文館、二〇〇三)。
- (5) 清野謙次『日本考古学・人類学史』上巻・下巻(岩波書店、一九五四・一九五五)、斎藤忠『日本考古学史の展開』(学生社、一九九〇)、國學院大学日本文化研究所編『近世の好古家たち—光圀・君平・貞幹・種信—』(雄山閣、二〇〇八)、杉本つとむ『日本本草学の世界—自然・医薬・民俗語彙の探究』(八坂書房、二〇〇二)、福田アジオ『日本の民俗学—「野」の学問の二〇〇年』(吉川弘文館、二〇〇九)他。
- (6) 鈴木廣之『好古家たちの19世紀—幕末明治における《物》のアルケオロジ』(吉川弘文館、二〇〇三)、吉田衣里『古物—

- 江戸から明治への継承」〔近代画説〕二二、二二〇三〕他。
- (7) 久留島浩「古物（古器旧物）」から「文化財」へ」(明治維新史学会編 講座明治維新11『明治維新と宗教・文化』有志舎、二〇一六)。
- (8) 前掲注(6) 鈴木二〇〇三。
- (9) 久留島浩・高木博志・高橋一樹編『文人世界の光世と古都奈良 大和の生き字引・水木要太郎』(思文閣出版、二〇〇九)、黒岩康博『好古の瘴気 近代奈良の蒐集家と郷土研究』慶應義塾大学出版、二〇一七) 他。
- (10) 以上の説明は、主に「小室家文書目録」(埼玉県立文書館、一九九七)、細野健太郎「近世後期の地域医療と蘭学―在村医小室家の医業を中心に―」(『埼玉地方史』四三、二〇〇〇)等を参考にした。追加寄贈分を加えた小室家文書の総点数は、七六二二点。うち書状一三三二九点、典籍三八三七点(井上かおり「小室家文書の寄贈と展示「小室家文書展」―在村医のまなざし―」『文書館紀要』二九、埼玉県立文書館、二〇一六)。
- (11) 重田正夫「幕末・明治初期「好古家」たちのネットワーク」(『埼玉の文化財』五一、二〇一一) 他。
- (12) 江戸幕府の官撰地誌。二六五巻・付録一卷。昌平坂学問所地理局総裁の林述斎編。文政十一年(一八二八)の成立。郡別郷村別に配列、郷村ごとの記述を主として沿革・支配関係・概況・小名・社寺旧跡・旧家などを記す(蘆田伊人編『大日本地誌大系(二) 新編武蔵風土記稿 第巻』雄山閣、一九五七)。
- (13) 尊攘派の豪農として有名な根岸友山の子。安藤野雁や平田鏡胤に国学を学ぶ。明治に入ってから貴族院議員・県会議長をとめる。上野図書館(現国立国会図書館)に青山文庫を寄贈。根岸友山・武香顕彰会編『根岸友山・武香の軌跡―幕末維新から明治へ』(さきたま出版会、二〇〇六)、重田正夫「明治初期における武蔵の「好古家」根岸友山と武香(上)(下)」(『熊谷市史研究』六・七、二〇一四・二〇一五) 他。
- (14) 三河岡崎藩儒。維新後、藩校允文館学監などを務め、のち「群書類従」に未収録の史籍の刊行をめざし、東京に近藤活版所をつくる(『講談社日本人名大辞典』講談社、二〇〇一)。

- (15) 重田正夫・白井哲哉編『新編武蔵風土記稿』を読む』(さきたま出版会、二〇一五)、重田正夫「根岸武香の『新編武蔵風土記稿』刊行とその購入者」(『熊谷市史研究』九、二〇一七)。
- (16) 津和野派の国学者・福羽美静によって明治十四年(一八八一)に設立。元長は、社員ではなかったが、小室家文書には同社の機関誌『好古雑誌』初篇第一〜十号・二篇二〜四号(小室4301-1〜10・4302-1〜3)が現存している。
- (17) 藤田大誠「近代国学と郷土史」(由谷裕哉・時枝務編著『郷土史と近代日本』角川学芸出版、二〇一〇)。
- (18) 大久保久雄「近藤瓶城と『史籍集覧』」(『出版研究』三、一九七二)。
- (19) 室町時代の戦記。『太平後記』ともいう。三巻。作者・成立年未詳。関東の政治的事件を編年体に記したものの「解説」『新編埼玉県史 資料編8』埼玉県、一九八六)。
- (20) 田口寛「『鎌倉大草紙』一刊行本文の性質について―『史籍集覧』所収本の形成情況」(『日本文学研究』四四、二〇〇五)。
- (21) 編纂物については、工藤航平氏が次のように定義しており、筆者も基本的にこれに従う。「一次利用が終わって蓄積された書類を、明確な意識のもとで二次利用を目的として編纂したものである。目的に合わせて文書や書籍、金石文や伝承といった諸情報を蒐集・精査し、効果的に史料を引用・配置して、解説や個人的見解を適宜加え、さらには目次や表紙を付けて装丁したものもある。主に文書や書籍の写しの羅列で構成され、業務や一件ごとにまとめられた参考資料となるもので、由緒書や旧記のような歴史叙述とは明確に異なるものである。」(工藤航平『近世蔵書文化論―地域〈知〉の形成と社会』勉誠出版、二〇一七、一七一―一八頁)。
- (22) 新井浩文「小室家文書所収の中世文書―『工村々舎叢書』所収「内山氏古文書写」について」(『文書館紀要』一一、埼玉県立文書館、一九九八)。
- (23) 芳賀明子「『好古家』の書簡集「内山手簡」―内山作信と小室元長との交流」(『文書館紀要』二五、埼玉県立文書館、二〇一一)。
- (24) 拙稿a「幕末・明治における「好古家」の随筆受容―武蔵国の在村医小室元長の場合―」(『書物・出版と社会変容』二〇、

二〇一六。

(25) 拙稿b「明治前期における「好古家」の新聞受容——埼玉県比企郡番匠村小室元長の交友関係を中心に」(渡辺尚志編『アーカイブズの現在・未来・可能性を考える』法政大学出版社、二〇一六)。

(26) 小瀬甫庵の後裔。金沢藩主・前田綱紀の待医。詩文をよくし、新井白石に賞讃された(『講談社日本人名大辞典』講談社、二〇一〇)。

(27) 入間郡阿諏訪村(現毛呂山町)生まれ。通称俊介、実名忠恕、号称称、鶯谷。三代元長に入門(文化財保護審議会編『安藤文沢―種痘の創始者郷土が生んだ蘭方医―』毛呂山町史料集第二集、毛呂山町教育委員会、一九九二)。

(28) 「堯民との共同生活外近況二付書状」(小室96)他。

(29) 順天堂初代堂主・佐藤泰然に学び、のち養子となる。長崎でポンペに師事し、帰郷後、佐倉養生所をつくる。維新後は大学東校に勤務し、明治六年東京下谷に順天堂医院を開設、八年湯島に移転した。下総佐倉出身。本姓は山口。通称は舜海。号は笠翁(『講談社日本人名大辞典』講談社、二〇〇一)。

(30) 常陸で代々酒造を営む家に長男として生まれる。佐倉藩医の佐藤尚中に漢学を学ぶ。見込まれて養嗣子となり三代目順天堂主。戊辰戦争では諸地に病院を開設し、負傷者の治療に従事した。明治になると陸軍大学病院頭取となり、明治二年ベルリン大学に留学。七年日本人で初めてベルリン大学医学部を卒業。八年帰国、順天堂医院で外科を担当し病院を発展させた。四十年大韓医院建設および軍陣医学貢献の功により男爵授爵(『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、二〇〇四)。

(31) たとえば、【20】「倒載」の文末には、「以上五条、天保戊戌春日四教塾客中梧窓詩話而抄録」との記述があり、【16】「王陽明小伝」から【20】までは、天保九年(一八三八)に、四教塾で林葆坡の漢詩文集『梧窓詩話』から抄録したものであることがわかる。以下、『不如学斎叢書』と『叢書』の項目番号は、前掲注(24)拙稿a二〇一六、一九四―一九五頁、【表3】『不如学斎叢書』『叢書』項目一覧】による。

(32) これらの祭文も『朝野新聞』に確認することができた(六月二十二日に小中村清矩、二十三日に島田篁村、二十四日に成島

- 柳北。星野恒の祭文だけは掲載されていない。元長は、祭文についても新聞から筆写したと推察される。
- (33) 勝田勝年「白石研究資料の整理と公刊」(『新井白石の学問と思想』雄山閣、一九七三) 他。
- (34) 「竹中邦香小伝」(松村操編・津田権平著『明治立志編 一名民間栄名伝』五篇、兎屋誠、一八八二)、「大槻文彦」(昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』二八、昭和女子大学、一九六八)、他。
- (35) 稲岡勝「対文部大臣版權侵害要償訴訟と内藤伝右衛門」(『都留文科大學研究紀要』六七、二〇〇八) 他。
- (36) 乾照夫「成島柳北研究」(べりかん社、二〇〇三)、一七七一―一七八頁・三三三頁の注(49)。
- (37) 『朝野新聞』を確認したところ、本記事が新聞に白石社の関係記事が掲載された最初であることがわかった。二日後の二十四日には、『東京日日新聞』にも「朝野新聞に見えたり」として同様の記事が掲載されている。
- (38) 明治前期に流行した言葉で、世間、世の中を意味する(東島誠「明治における江湖の浮上」『公共圏の歴史的創造―江湖の思想へ』東京大学出版、二〇〇〇)。
- (39) 活版の始祖と呼ばれた本木昌造(一八二四―一八七五)の門下生である山田栄蔵が創設した活版印刷所の「啓蒙舎」が基となり、竹中邦香が社長に就任、「国文社活版」として評価を高めた(高橋トオル「究極の印字書体の研究」『京都精華大学紀要』四四、二〇一四)。
- (40) 明治十四年(一八八一)、渥美契縁とともに教導職廃止を政府に建言、翌年東本願寺の執事となるが、同年越後万徳寺の住職・長田立に本山事務改革を主張したものと取り調べを受け、職務を解かれる(赤松徹真他編『真宗人名辞典』法藏館、一九九九)。
- (41) 明治十三年二月に設立趣意書を頒布、同十四年五月、有栖川宮熾仁親王を会長に推戴した。孔子祭の挙行、公開講座の開講、学術誌『斯文』の発行などの活動を行った(『斯文六十年史』斯文会、一九二九)。
- (42) 後藤靖「自由民権期の交詢社名簿」(『立命館大学人文科学研究所紀要』二四、一九七七)を参照。
- (43) 大谷栄一「近代仏教にみる新聞・雑誌、結社、演説」(島園進・高埜利彦・林淳・若尾政希編『シリーズ日本人と宗教』――

近世から近代へ5 書物・メディアと社会」（春秋社、二〇一五）。僧侶の他に、のちに岡倉天心とともに美術雑誌『国華』を
発刊していく高橋健三（一八五五—一八九八）の名前等も見える。

(44) 竹中邦香をはじめとした発起人のメンバーが少なからず交詢社の社員となっていたことで掲載が可能になったと考えられる。
「小室元長蔵書」印および「尚古堂」印。本文末尾に「文化己巳歳夏五月二十七日林家蔵本校合」とある。

(46) 名は、礼本、のち喜六・葆光。通称、伊右衛門・伊兵衛。号、櫛園。小林歌城・黒川真頼に師事。箱館奉行支配組頭として
蝦夷開拓に従事。文久元年（二八六二）向山黄村に随行し欧米を巡る。維新後は一時東京女子師範学校（現お茶の水女子大
学）に奉職したが辞職。和歌・茶道に余生を送った（市古貞次他編『国書人名辞典』第二卷、岩波書店、一九九五）。

(47) 前掲注（23）芳賀二〇一二。

(48) 「親睦帖」（小室家蔵）書簡21 明治十二年八月十八日。

(49) 芳川波山の養子。内弟子として育てられ、四教塾から昌平學へ進み、忍藩の藩校・進脩館教授となる。明治十四年には、羽
生中学校教員となっている。その後、川越中学校教員。元長とは波山の漢学塾の学友（前掲注（2）村山二〇〇九）。

(50) 「芳川恭助書簡」（小室二〇一〇・一一）「明治十二年」十月七日・十一月三日。

(51) 横見郡久米田村（現吉見町）の名主・戸長を務めた豪農。平田派の国学者・鈴木真年（一八三一—一八九四）と親交をもち、
「皇国学」を志した（前掲注（23）芳賀二〇一二）。

(52) 「内山手簡」（小室蔵）書簡6 明治十三年一月三十日。

(53) 「内山手簡」（小室蔵）書簡8 明治十三年四月三十日。

(54) 「内山手簡」（小室蔵）書簡3・6 明治十二年四月二十四日・明治十三年一月三十日。

(55) 「内山手簡」（小室蔵）書簡19 明治十四年十二月二十日。

(56) 号は、雪畝、拙甫等。比企郡平村（現ときがわ町）の有力豪農で、明治十年には、第五大区の副区長を務めた（前掲注
（23）芳賀二〇一二）。

- (57) 「親陸帖」(小室665) 書簡27・書簡35 明治十二年「十二月」十三日・明治十三年一月十三日。
- (58) 旧幕臣の国学者。一橋家の目付役を務めた畠山常操(一七七〇—一八四二)の孫にあたる。鑑定家としても知られ、鎌倉初期の武士・畠山重忠の後裔を名乗った(大川茂雄・南茂樹『国学者伝記集成』大日本図書、一九〇四)。
- (59) 「畠山手簡」(小室68) 書簡14 明治十三年(一八八〇)二月五日。
- (60) 「畠山手簡」書簡38 明治十四年(一八八一)六月十八日。その後も、元長と如心齋の間では、六月二十一日、七月十八日と白石の墓所をめぐるやりとりが続く。
- (61) 国文学研究資料館「明治期出版広告データベース」にて検索。 http://basel.nijiac.jp/info/lib/meta_pub/G0037150meijisub
- (62) 学海と号し、明治後は百川を名とした。江戸生まれの佐倉藩士。藤森弘庵に儒学ならびに詩文を授かる。安政から慶応期は藩の中小姓、留守居役等を歴任。維新後は藩公議人、権大参事。明治八年、太政官修史局(のち修史館)の編修に任ぜられるも重野安繹派による川田甕江派排斥のため、同十四年文部省音楽取調掛兼編輯局少書記官に転任。同十八年非職、以後文筆で糊口した(白石良夫『幕末インテリジェンス—江戸留守居役日記を読む—』新潮社、二〇〇七、昭和女子大学近代文学研究室『近代文学研究叢書』一〇、昭和女子大学近代文化研究所、一九五八他)。
- (63) 依田学海著・学海日録研究会編纂『学海日録』第五卷(岩波書店、一九九二)、二三八—二三九頁。
- (64) 依田学海著・学海日録研究会編纂『学海日録』第七卷(岩波書店、一九九二)、二三頁。
- (65) 一橋大学附属図書館所蔵。杉山令吉旧蔵書。請求記号 Qp.A86B1—7。
- (66) 貸本業を営む家に生まれる。安政四年(一八五四)独立、吉川書房を開店。明治十年頃より出版も始め、三十三年(一九〇〇)、商号を弘文館と改める。三十七年(一九〇四)改組して店名を吉川弘文館に(『出版文化人名辞典』日本図書センター、一九八八)。
- (67) 陸奥白石の生まれ。名は定介、のち定助、号は竹の屋主人。東大卒。『古事類苑』編纂委員・国学院学監補等歴任後、日本大学に皇道学院を開設、院長となる。また明治神宮奉斎会会長・皇典講究所理事・神祇院参与を務めた(『名家伝記資料集成』

思文閣出版、一九八四)。

- (68) 明治三十二—三十九年(一八九九—一九〇六) 一六八冊、図版二二冊。和装本。白石の「本朝軍器考」を収録。一九二八年から一九三三年にかけて関根正直、和田英松、田辺勝哉監修により増訂版四〇冊、索引一冊が洋装本発刊。ちなみに大倉精神文化研究所の貴重コレクションには、「今泉定助寄贈書」として、洋装本四十二冊が所蔵されている(平井誠二「第二十六回研究所資料展 図書館の貴重コレクション展」『大倉山論集』六一、二〇一五)。
- (69) 宮崎道生「普通学の系譜—白石と鷗外—」(『近世・近代の思想と文化 日本文化の確立と連続性』ベリかん社、一九八五)、二〇九頁。
- (70) 宮崎道生「白石史学と明治の史学」(『近世・近代の思想と文化 日本文化の確立と連続性』ベリかん社、一九八五)、二六〇頁。
- (71) 柳北が「白石先生年譜」に寄せた跋中の「余一読欣々然曰、是亦有用之書也」を指すと考えられる。
- (72) 学海居士「新井白石先生の手簡」(『国民之友』第四卷四九号) 明治二十年五月二日。
- (73) 『白石遺文拾遺』(小室308) 天保十二年(一八四二) 跋文。
- (74) 柴田光彦・神田正行編『馬琴書翰集成』第二卷(八木書店、二〇〇二)、二七一頁。
- (75) 大沼宜規「明治前期における歴史考証とその淵源—「経済有用」の系譜—」(『季刊日本思想史』六七、ベリかん社、二〇〇五)、同「前田夏蔭の「公務ニ有益之学」—幕末期における考証派国学者の動向—」(『日本歴史』八〇四、二〇一五)。藤田大誠氏も近代国学における「実用性」を分析の視点のひとつとしている(藤田大誠『近代国学の研究』弘文堂、二〇〇七)。

白石関係著作出版略年表（明治20年代まで）

| 年号 | 西暦 | 記事 |
|-------------|---------------|---|
| 天明2年 | 1782 | 『白石先生詩範』 |
| 天明年中 | 1781～ 1788 | 『校正新安手簡』 |
| 寛政年中 | 1789～ 1800 | 『本朝軍器考』『坐間筆語』『江閩筆談』 |
| 寛政12年 | 1800 | 『鬼神論』 |
| 文化4年 | 1807 | 『停雲集附白石先生詩範』 |
| 文政10年 | 1827 | 『白石紳書』 |
| 天保年中 | 1830～ 1843 | 『読史余論』『藩翰譜』（第10巻まで） |
| 天保～ 安政年中 | 1830～ 1859 | 板倉勝明編『甘雨亭叢書』40巻別集16巻 （うち『南島志』『白石先生遺文』『白石先生遺文拾遺』『奥羽五十四郡考』『木門五十四家集』『奥羽海運記』『畿内治河記』『人名考 准后准三后考』『鬼門説』が白石著作） |
| 万延元年 | 1860 | 『読史余論』『孫兵法択』 |
| 文久2年 | 1862 | 『蝦夷志』 |
| 明治4年 | 1871 | 新井源八郎校『古史通』松山堂書店 |
| 明治9年 | 1876 | 萩原裕校『読史余論』吉川半七 |
| 明治14年 | 1881 | 2月頃、白石社結成。 6月19日、白石の祭典を開催。 7月20日、竹中邦香校『折たく柴の記』・大槻文彦校『采覧異言』白石社 8月27日、三田葆光『白石先生年譜』白石社 |
| 明治15年 | 1882 | 5月17日、筑作秋坪・大槻文彦校『西洋紀聞』白石社 5月19日、白石の第二期追祭を開催。 |
| 明治16年 | 1883 | 1月17日、国文社幹事・竹中邦香が負債の責任をとり退職。 5月15日、竹中邦香校『五事略』白石社 |
| 明治17年 | 1884 | 久保季茲『白石遺文孝徳天皇改新詔の論』『史学協会雑誌』8 |
| 明治18年 | 1885 | 小宮山経介『白石先生逸事』『史学協会雑誌』26 |
| 明治19年 | 1886 | 鈴木慧淳死没。 |
| 明治21年 | 1888 | 竹中邦香校『折たく柴の記』雁屋清吉 田口卯吉『日本外史と読史余論』『東洋経済雑誌』429～435 依田学海『新井白石同事異文の記事』『国民之友』34 同『新井白石小伝』『日本大家論集』10 |
| 明治22年 | 1889 | 依田学海『新井白石先生の手簡』『国民之友』49 |
| 明治23年 | 1890 | 内藤耻叟『校正標注折たく柴の記』青山堂 佐藤保太郎『新井白石の俳諧』『東洋学会雑誌』4-10 |
| 明治24年 | 1891 | 日下寛『藩翰譜考』『史学会雑誌』2-23 松井広吉編『新井白石』日本百傑第10編、博文社 内藤耻叟『読史余論を読む』『皇典研究所講演』50 |
| 明治25年 | 1892 | 内藤耻叟『新井白石評』（仮題）徳川十五代史第7編、博文館 |
| 明治26年 | 1893 | 足立栗園『新井白石』『史海』22 大内青巒『新井白石肖像』『史海』24 |
| 明治27年 | 1894 | 吉田東伍『新井白石一～四』『徳川政教考第3編』富山書房 山路愛山『新井白石』『十二文豪』8 天民生『新井白石先生』『同志社文学』83 渡部乙羽『新井白石の画』『絵画叢誌』86 大槻如電校『校刻藩翰譜』白石社 |
| 明治28年 | 1895 | 内藤耻叟『白石著書（古学者伝）』『皇典研究所講演』17-169 上田万年『言語学者としての新井白石』『史学雑誌』6-2・3 三宅青軒『白石を造りし庭訓』『太陽』1-11 |
| 明治29年 | 1896 | 内藤耻叟『新井白石の兵談』『國學院雑誌』2-7 竹腰与三郎『新井君美の出身ほか』『二千五百年史』第二十五章392～394節 |

『新井白石関係文献目録』（宮崎道生『新井白石序論 増訂版』吉川弘文館、1976）、依田学海著・学海日録研究会編纂『学海日録』第1～11巻・別巻（岩波書店、1991～1993）等を参考に筆者作成。